

<研究報告>

協働的な学びの指導者を養成するデンマークの教員養成

伏木久始 信州大学教育学部教育科学講座

キーワード：デンマークの教員養成，協働的な学び，TV-prof，教育方法

1. はじめに

学校教育において「基礎学力の低下」や「いじめ」の問題などは多くの国で共通する教育課題となっているが、移民の増加や経済的格差に起因する公教育の揺らぎは、克服すべき課題を一層複雑化させている。さらに子どもを取り巻く家庭や地域の教育環境も刻々と変化し、教師の仕事はますます困難なものとなっている。そうした中で、教師の指導力向上に対するニーズが高まり、日本においても「実践的指導力」の育成が謳われ、大学の教員養成カリキュラムの改革や教育組織のFD（ファカルティ・ディベロップメント）が盛んに取り組まれている。

しかし、学校現場で「即戦力」として職務を遂行できる力量を求める採用側と、教員免許を事実上認定するための評価基準（「教員スタンダード」など）を設定して説明責任を果たそうとする大学側の双方が、個人の資質・スキル・能力等を診断・評価する枠組みの中でのみ、「質」保証を位置づけてしまうことには注意が必要である。なぜなら、大学で果たすべき教員養成の責務は、一人で立派に教職の実務をこなせる「完成された教師」を送り出すことではなく、それぞれの職場の状況に応じて自分の個性を発揮し、同僚との協働的な仕事を積み上げながら、「未完成だからこそ成長しよう」と努力し続ける教師を学校に迎え入れてもらうことだと考えるからである。

また、2007年度から復活した全国学力調査の導入に象徴されるように、子どもの「学力」も数値化できる要素に還元され、学力を向上させる手立てとして、個人の正解・不正解箇所を根拠にいわゆるPDCA（Plan－Do－Check－Action）サイクルで指導していくという考え方が多くの実践報告に目につくようになってきた。しかし、ある問題に「正答できなかった」ことの原因を、子ども個人の能力に限定する前に、その類の問題を考え合った授業の質や教育方法、さらには学びの場の人間関係等にも改善点を見出すという姿勢が必要である。同様に、校内の個別事例に適切に対処できなかった教師の資質・能力を評価する前に、個々の問題事象に対処する際の教員間ネットワーク、あるいはチーム指導体制の不備が問題解決を阻んだ可能性にも着目する必要がある。つまり、学校社会で成長していく子どもや教師の日常に即して考えていくとき、それぞれに求められる能力やスキルを個人単位に切り分けて補充・開発していくこと以上に、周囲との関係性のなかで力量を磨いていく教育方法が強調されるべき

であると考ええる。

以上のような問題意識に立つとき、日本の教員養成課程における教育方法には、他者と協同して取り組む課題、グループワークを基本とするプロジェクト学習等があまり採用されていない実情を再認識することができる。受験体制にどっぷり浸かって個人競争を勝ち抜いてきた大学生に、子どもたち同士が学び合う学習によって獲得する「学力」や、異質な者同士の交流により育まれる人間的な能力について真に理解させるためには、彼ら自身にそうした学び方を経験させることが必須であると考ええる。

こうした動機から、筆者は教員養成段階でグループワークを中心とした教育実習を長年実施しているデンマークの教員養成カレッジに着目してきた。その中でも、特に2007年度から保育士養成所との共同プログラム：「tværprofessionelt（職業を越えて）」（以下「TV-prof」と略す）を必修化している教員養成の実践現場を、2年間にわたって継続調査してきた。

本稿では、現地でのインタビュー取材をもとに、デンマークの教員養成の概要を整理した上で、コペンハーゲン地域で新しく取り組まれている「TV-prof」のプロジェクトの実施プロセスを、協同的な学びを指導できる教師の養成モデルとして紹介し、今後の日本の教員養成教育が参考にすべき点を指摘する。

2. デンマークの教員養成の概要

2.1 教員養成のアウトライン¹⁾

デンマークでは、「ペダゴギー」と呼ばれる保育士、9年制の義務教育学校であるフォルケスコーレの教員、後期中等学校（ギムナジウムほか職業系の学校等）の教員の養成が、それぞれ異なるルートで独立して行われてきた。この三者の養成教育は以下の通りである。

ペダゴギーには、就学前教育を担う保育所の保育士の他に、早朝の始業前の保育や放課後の子どもの居場所を管理監督する学童クラブ・青少年クラブ等の保育士もいるが、それらの資格を得るためには、基本的には高等学校卒業後に3年半の修学を要する保育士養成のための専門学校を卒業して免許を取得することが要件となる。

一方、フォルケスコーレの教員になるためには、基本的に4年コースの教員養成カレッジを卒業して学士号を取得する必要がある。デンマーク国内に18カ所（これに加えてフェロー諸島とグリーンランド島にも一カ所ずつ）設置されている教員養成カレッジに入学するためには、高等教育準備試験等に合格することが条件となるが、日本のような他人との競争試験ではない。教育省で定めた大枠の教育課程に基づいて、それぞれのカレッジが独自のカリキュラムを編成しているが、入学してくる学生の平均年齢は高く、中等教育を終えてすぐに進学してくる学生よりも、何らかの社会的経験を積んでから入学してくる学生の方が多い。これも高等教育まで学費がすべて無料であることや、18歳以上の学生には公費で生活支援金が支給されるという事情も関

係している。

教育実習は一般の公立学校にて行われるが、学校側は受け入れを断ることはできない。教育実習期間は合計で24週（以上）と決められているが、カレッジ側は24週間の実習を4年間に分割し、それぞれのセメスターでの実習にテーマをもたせて、学校現場での実習とカレッジでの授業とを有機的に関連づける試みを展開している。なお、多くのカレッジでは、3年次での実習先として、外国の学校での教育実習や特別支援学校等の特別実習の機会を用意している。

教員養成カレッジを卒業した学生は、「学級教師（Klasselærer）」として学校に赴任し、従来は第1学年から第9学年までを持ち上がりで継続担任する場合が多かったが、近年では政府の要請を受けて第7学年以上の教科教育を専門に担当する「教科教師（Subjectlærer）」を採用する自治体（学校）が徐々に増えている。

後期中等学校には進学コースであるギムナジウムや職業系の高等学校および職業訓練学校などがあるが、ギムナジウムの教員免許を取得するためには、カレッジではなくユニバーシティの4年制学士課程を卒業した後、ペダゴギクム（pædagogikum）と称する教員養成コースにて、大学での理論課程およびギムナジウムでの実地指導課程を履修することが必須となる。

いずれも教員養成に特化した授業と長期間の教育実習が課せられているものの、日本の教職課程認定のシステムと比べると、教員養成カリキュラムに求められる法的基準はかなり柔軟である。また、デンマークでは伝統的に保育士や教員および看護師は、カレッジ（短期職業専門大学）で実践的な教育を中心に養成され、アカデミックな専門理論と教養課程を広く学ぶユニバーシティでの教育とは異質の専門職養成コースを卒業することで資格を得てきた。ただし、近年はヨーロッパ共通資格を付与しようとするボローニャ宣言²の流れと、財政的な理由から養成機能を統合して総合大学的な教育機関に再編しようとする動きが進行している。

2.2 教員養成プログラムの目標

デンマークの教員養成プログラムの目標が示された法令（1998）³によれば、フォルケスコレの教員に求められる基礎的能力として、次の4項目があげられている。

- | |
|--|
| <p>①教科ならびに教育学に関する理論、義務教育学校で行う諸活動の実践的基礎、その他の授業ならびに提示の仕方に関する実践的基礎をそれぞれ修得する。</p> <p>②理解面や実践面の適正を生かして<u>協働できるように</u>、また授業の計画、実施、評価が行えるようにする。</p> <p>③教科的側面を含む課題研究を通して、<u>協働を通して</u>、さらには<u>教育責任を共に発揮しあうことを通して</u>人間的成長を図ることができる。</p> <p>④子どもや大人との学習に関わる取り組みに高い参加意識をもち、喜びを見出すことができる。</p> <p style="text-align: right;">（下線は引用者）</p> |
|--|

「理解面や実践面の適正を生かして協働できるよう」に、あるいは「課題研究を通して、協働を通して、さらには教育責任を共に発揮しあうことを通して人間的成長を図る」と目標を掲げるデンマークでは、教育実習も4名ほどの学生チームで取り組み、1～3年次の実習期間は授業案の構想も授業実習も協働して行うことが通例である。こうしたグループワーク中心の教員養成教育に対して、個人の能力を適切に評価すべきだとする前教育大臣等の意見もあったが、教員養成カレッジや学校現場からの強い反対もあり、現在でもデンマークでは「協働する学び」が重視されている。

3. フォルケスコレ教員養成課程と保育士養成課程の協働プロジェクト

3.1 UCCの取り組み

デンマークのフォルケスコレの終業時刻は午後2時過ぎであるが、多くの子どもたちは自宅に帰ることなく学童の施設に移動することになる。学校施設内に学童部屋を設ける学校も多いが、校外にある場合でも、子どもたちが歩いて移動できる場所に学童の施設が存在する。放課後のみならず、学校の始業時刻前の早朝も学童に子どもを預ける保護者も少なくない。つまり、子どもたちは一日の生活の中で、学校の“先生”との関わりに匹敵するくらいに学童の“先生”と接することになる。

こうした事情も関係して、コペンハーゲン市内の高等教育機関の連携組織であるUCC (University College of Capital) が、教員養成カレッジと保育士養成専門学校との共同プログラムを実践することを考案した。これは、通常の教職課程の講義単位を圧縮して4週間分の時数を確保し、それぞれの養成コースに学ぶ学生を混合したグループ編成を行い、PBL (Project-Based-Learning) 方式での総合学習を意図した授業開発である。

筆者は、このプロジェクトを調査するために、UCCのエリア内にあるブローガー (Blaagaard) 教員養成カレッジを2度 (2008年9月、2009年3月) 訪問し、「TV-prof」に関する演習場면을参観し、授業担当者らへのインタビュー調査などを行ってきた。以下、これまでの調査の結果を総括し、本プロジェクトの概要を紹介する。

3.2 TV-profの目的

このプロジェクトの履修学生に対して、オリエンテーションの機会に次のような説明がなされている。

「教育機関は職業間交流の要素を用意しなければならない。つまり、教員専門家としてのアイデンティティを持ち始める学生が、その他の関係する教育での洞察力と、実際の仕事で抱える課題への解決において、自身と他者の職業間または境界線にある共通事項についての理解に関する要素を学ぶことである。」 (教員の専門職性に関するアナウンスメント 2007, No. 219.)

Årsplan 09-10, maj 09

DAG		Første feriedag	Første mødedag	1. Årg. 2009	2. Årg. 2008	3. Årg. 2007	4. Årg. 2006
32	3.8.09		3.8.09	Forberedelse og indflytning			
33	10.8.09		10.8.09	Møder m.m.		Skr.sygeeks.	Skr.sygeeks.
34	17.8.09			Intro	Sygeeks.	Sygeeks.	Sygeeks.
35	24.8.09			start ti			start ma
36	31.8.09				start ti	start ti	
37	7.9.09						
38	14.9.09						Praktik
39	21.9.09						bedømmelse
40	28.9.09			teori/metodeforløb			
41	5.10.09			F	F	F	F
42	12.10.09	12.10.09					
43	19.10.09			Praktik			
44	26.10.09			PM			
45	2.11.09						
46	9.11.09						
47	16.11.09						
48	23.11.09						
49	30.11.09						
50	7.12.09						
51	14.12.09						
52	21.12.09	23.12.09		F	F	F	F
53	28.12.09			F	F	F	F
1	4.1.10						AO og sygeeks
2	11.1.10			Praktik			BA-projekt
3	18.1.10						BA-projekt
4	25.1.10						BA-projekt
5	1.2.10						
6	8.2.10				Tv.proff.		
7	15.2.10				Tv.proff.		
8	22.2.10				Tv.proff.		
9	1.3.10				Tv.proff.		
10	8.3.10						
11	15.3.10						
12	22.3.10				timeløse dag		BA-projekt
13	29.3.10			F	F	F	F
14	5.4.10	5.4.10	6.4.10				
15	12.4.10						

AFTEN og net

1. Arg	2. Arg	3. Arg	4. Arg
2009	2008	2007	2006
hjemmearbejdsuge m.m.			
Augustdage		Skrygeeks	Skrygeeks
Intro	Dageeks	Dageeks	Sygeeks
Intro			start ma
start ma	start ma	start ma	
			Praktik
			(bedømmelse)
teori/metodeforløb			
F	F	F	F
PM			
prøpsamlng			
		selvstudie	
		selvstudie	
F	F	F	F
F	F	F	F
Praktik			Sygeeks
			BA-projekt
			BA-projekt
			BA-projekt
	Tv.proff		
	Tv.proff		
	Tv.proff		
	Tv.proff		
timeclose tag			
			BA-projekt
F	F	F	F

図 1. TV-prof の 4 週間の位置づけ

表1. TV-prof のグループ編成

グループ	教員養成校	保育士養成校	指導担当教員
1G 53名	Blaagaard からの30名	Ballerupからの23名	Betina Jakobsen: (BI) Vinnie Firtz: (Ba)
2G 52名	Blaagaardからの31名	Ballerupからの21名	Betina Jakobsen: (BI) Lisbeth Harsvik: (Ba)
3G 52名	Blaagaardからの21名	Ballerup からの31名	Pierre Johnsen: (BI) Caroline Jacobsen: (Ba)
4G 47名	Blaagardからの21名	Hojvangからの26名	Karen Braad: (BI) Bill Cleary: (Ho)
5G 50名	Blaagaardからの26名	Hojvangからの24名	Helen Nyboe: (BI) Carsten Frank Olesen: (Ho)
6G 53名	Blaagaardからの26名	Hojvangからの27名	Gunnar Green: (BI) Trine Holst Mortensen: (Ho)

そして、このプロジェクトでの一番のねらいは職業間交流を推進する協働であるが、具体的には「インクルージョン（包摂）とエクスクルージョン（排除）」という共通フレームでのテーマ・プロジェクトに取り組むことが要求される。このプロジェクトで学生たちに与えられる目標とは、以下のことを得ることである。

- ・自身の職業アイデンティティへの知識
- ・職業実践において自身の職業が会合う他の職業への洞察力
- ・職業間交流の協働への適正
- ・教育機関で生成する「包摂」と「排除」の問題についての理解

また、授業における重点は、学生が以下のことを実現するよう配慮することである。

- ・教育的実践がどのように見えてくるのかについての関連する概念を習得する
- ・教授法の理解・発展を分析するための見解、理論、方法を使う
- ・職業間交流のつながりにおける専門職の複雑さをディスカッションする
- ・職業の機能と専門性への知識を与えると同時に、協働作業が持つ職業の機能、可能性、限界を与えるという技術的な二重の側面を習得する
- ・教育現場における「包摂」と「排除」の思考体系の洞察力を得る
- ・職業間交流の協働と「包摂」の状態への洞察力を得る

この4週間のプロジェクトは2年次の学年末に設定され、図1に示されている通り、2008年度入学生の場合は2010年2月8日からの第6週目からスタートする。この4週間の期間中、通常の学習スケジュールが一時停止されるため、学生はこのプロジェクトに専念できる。

3.3 学習集団の編成

教員養成校であるブローゴー（Blaagaard）と、二つの保育士養成校、すなわちバレロップ（Ballerup）とホイヴァン（Hojvang）からそれぞれ学生が集められ、表1のようなグループ編成がなされる。6グループそれぞれに指導担当の教員が3校から混合で割り振られ、学生のみならず教員側も「領域を越えて」取り組むことになる。

なお、各グループ50名前後の集団は、さらに6～8組の小グループに細分化され、その小グループごとに調査探究活動に取り組むことになる。

3.4 授業の実際⁴

授業は、「包摂」と「排除」の視点における職業間交流の実践のディスカッションに焦点が当てられる。授業時間のほとんどは学生がグループに分かれてそれぞれの職業を調査するというプロジェクトベースの活動に使われる。

第1週目には、プロジェクト全体の説明の後に、テーマに関わる講義を受け、それをもとにグループ討議を行い、職業間交流にちなんだ具体的な協働場面の事例分析およびディスカッションが行われる。2007年度入学生による2008年度の実践の場合、7週目（2009年2月9日からの週）からプロジェクトがスタートしているが、プロ

ーゴー教員養成カレッジを会場に保育士養成校の学生・教員スタッフも一堂に会し、表2のようなスケジュールで展開されている。テーマに関わる映画が上映され、それについての講義やディスカッションを通してプロジェクトの方向性を確認した後、グループ編成を行い、チームごとに計画を立てるという展開で進められている。

表2. 第1週目のスケジュール

2 / 9 (月)	2 / 10 (火)	2 / 11 (水)	2 / 12 (木)	2 / 13 (金)
9:00-11:30 集会場 学生全員が集合しプロジェクトの説明を受ける。 担 当 講 師 : Bent Madsen と John Willumsen	9:00-11:30 集会場 Martin Spang Olsen の "Eksperimentet" を大スクリーンで視聴する→休憩後、H5 教室 : 映画の内容についてディスカッションを行う→グループ活動	9:00-11:30 H5 教室 内容 : ◆プロジェクト・ワークの形式 ◆グループに分散 ◆協働契約 ◆グループごとに学校や教育機関の訪問 ◎パソコンを持参	グループ作業 プロジェクト選択 調査訪問にするか 読書日にするかの決定、グループワーク H5 教室使用可能	9:00-11:30 H5 教室 職業間の交流と保育士と教員の協働 参考文献 : Gytz Olesen と Morten Ejrnæs の Bourdieu - afsnittet BUPL と DLF のウェブサイト パソコンを持参
12:00-13:00 H5 教室 グループの発表 職業間交流的な問題やジレンマの紹介に関するディスカッション	12:00-13:00 H5 教室 職業の専門性と「包摂」と「排除」のテーマについての視点の議論	12:00-13:00 H5 教室 UCC と現代的な視点での職業の専門性 参考文献 : Katrin Hjort	12:00-13:00	12:00-13:00 H5 教室 (午前中の続き) 今週のレジュメをウェブ上の指定サイトに掲載する

小グループに編成されたチームごとに、「包摂」と「排除」という共通テーマになったサブカテゴリーの研究テーマを決め、それぞれの専門的な視点から職業間交流に関して議論することが重要な学びになると考えられている。

第1週（年次カレンダーの「7週」）を経験した学生たちの振り返り記録の中から、第5グループ（Diana, Guluzar, Kevin, Fie, Cille, Lars. Nece, Martina）がまとめたレジュメを、文意を変えない程度に要約して以下に引用する。

最初の週の月曜日には、職業間交流のプロジェクトの流れについて紹介があった。それは将来の保育士と教員が4週間の協働プロジェクトを行うとい

うものだった。共通テーマはデンマークの教育機関における「包摂」と「排除」とされ、まず Nvie（国立情報センター）の Bent Madsen と John Willumsen 氏の講義とそれに関連するディスカッションが行われた。必ずしも「包摂」が望ましいとは言えない場面もあることを学んだ。休憩時間の後、Helen 先生の演習を通して私たちはお互いをよく知ることができ、学び合う関係性を構築できたように思う。火曜日は、Martin Spang Olsen の "Eksperimentet" を全員で視聴し、教育方法やその背景にある理論そして結果について、ディスカッションした。この映画は、体験によって子どもの感覚が豊かになり、その知能を高めるという内容だったが有意義な議論ができたことはとても良かった。水曜日はグループで活動する際の約束事等を決めた。そこで私たちは教員と保育士の職務内容等について紹介し合った。木曜日は個人でのリサーチを目的とした読書日とし、金曜日は Carsten 先生が職業間交流の意義や困難さについて講義した。そして、最後に教育における職業間交流に関する内容が扱われている労働組合のプレゼンテーションを視聴した。

表3. 第2～3週目のスケジュール

2 / 16 (月)	2 / 17 (火)	2 / 18 (水)	2 / 19 (木)	2 / 20 (金)
<以後2週間の授業 場所は Hojvang> グループワーク、 プロジェクトに関 するのディスカッ ションのつづき又 は個人リサーチ	9:00-11:30 職業間交流な業務 における「包摂」 と「排除」の概念 参考文献： Helen Krag	9:00-11:30 教育機関における「包摂」 と「排除」参考文献： Janne Hedegaard Hansen と Karsten Hundeide ----- 12:00-15:00 グループ指導	読書、執筆、調 査訪問、グルー プワーク	読書、執筆、調 査訪問、グルー プワーク
2 / 23 (月)	2 / 24 (火)	2 / 25 (水)	2 / 26 (木)	2 / 27 (金)
読み書き、プロジ ェクト・ワーク、 訪問調査	読み書き、プロジ ェクト・ワーク、 訪問調査	9:00-10:30 教育機関の訪問（全員） 10:45-13:30 テーマ、問題、ジレンマ 選択と参考文献に関する 指導とプロジェクト・ワ ーク	プロジェクト・ ワーク	グループの指導 プロジェクト・ ワーク

3.5 プロジェクトのまとめと成果発表

グループごとのプロジェクトのまとめとプレゼンテーションに関しては、以下のようないガイドラインが設定されている。

①まとめのレポートについて

◇職業間交流的な協働の中で選択した問題の整理と、それに関連する専門的な要素の説明が簡潔で適当なものでなければいけない。

◇問題提起には「包摂」と「排除」,「職業間交流」の3つのキーワードが入っていることが求められる。

◇まとめはA4サイズの紙4～6枚にワープロで書くものとし、表紙、参考文献リスト、付録等はその枚数に含めない。文字サイズは12pとし、行間は1.5とする。

その内容に記載すべき項目として次のリストが指定されている。

- ・ 学生の名前と学生番号／学生各自の教育機関／まとめのまとめにかかった時間／指導講師の名前／タイトル／目次リスト／問題提起と問題報告／参考にした出典の主要なポイントにおける問題提起と問題報告の見地（描写と分析）／結論／使用した参考文献やその他のソース

②プレゼンテーションについて

最終の第4週（年次カレンダーの10週）めに必修のプレゼンテーションを行う。

第3週目からはプレゼンテーションのための準備を始めることになる。まとめはグループで行った活動結果をプレゼンするための基礎となる。最終的なプレゼンテーションは第4週の木曜日と金曜日に行われるが、プレゼンテーションはまとめの問題提起の視点やディスカッションを示すために念入りに作り上げること。

表4. 第4週目のスケジュール

3 / 2 (月)	3 / 3 火)	3 / 4 (水)	3 / 5 (木)	2 / 27 (金)
プロジェクト・ワーク	グループごとの指導とプロジェクト・ワーク	プロジェクト・ワーク	8:30-11:30 H5 教室 成果発表	8:30-11:30 H5 教室 成果発表
				H5 教室 評価

筆者はこのグループ・プロジェクトの成果発表会が行われた2009年の3月5日から6日に現地を訪問して実際のプレゼンテーションを参観した。クイズを交えながらパワーポイントを効果的に使用して視覚に訴えるグループや、学級場面における「包摂」と「排除」の事例をロールプレイで再現したビデオ映像を流して説明するグループ、なかにはアコースティックギターを弾きながらメッセージを歌詞にのせてアピー

ルするグループもあり、いずれもグループのチームワークを十分に感じられるプレゼンテーションであった。

発表会後には、教員側が用意した授業評価の質問紙に学生が答えるとともに、担当教員がグループごとに事後指導のミーティングの時間をとっていた。そこでは4週間のグループワークの取り組み方と最終的な研究成果に対する教員側の評価コメントが発せられるが、「現実に即したテーマ内容だった」、「調査方法が工夫されていた」などと良かった点を十分に賞賛しつつ、「コンセプトの定義が不十分だった」、「プロジェクトでまとめた内容とプレゼンのコンテンツとの関連が薄かった」などと不十分だった点に関しても専門的な見地から指摘がなされ、今後の学習活動に活かせるような指導が考えられていた。

4. TV-prof の取り組みに学ぶこと

4.1 UCC の共通版授業評価シート⁵ から

このプロジェクトの導入を決めたUCCが期待した教育成果の内実は、授業後に学生に回答を求めた授業評価シートの項目から推測することができる。この質問紙は、各質問に対し、「5＝とてもそう思う」から「1＝全くそう思わない」までの5件法で回答するようになっているが、以下にその一部を抜粋する。

- ①自分の教員／保育士という職に対して、より鋭い理解を得ることとなった。
- ②そのほかの関連ある職の人たちと協働して働くことにもまた、自分はプロとして資格があると感じる。
- ⑤私は、教育的な仕事における「排除」について、意識を向上させ関連知識を得た。
- ⑧私は「排除」と「包摂」、そして関連する概念に正確な理解を得た。
- ⑨教育的な仕事における複雑性が、この職業協働を通じてより明白になった。
- ⑩学生間における職業を越えてのプロジェクト・ワークは大切だった。

すなわち、それぞれの専門的な視点が同じ環境、概念、理論に関係しているということに気づかせ、それは同時に同じ重要なジレンマの理解、協働、問題解決への可能性に光を当てなければならないということへの理解を促進させるという判断がある。このアンケート調査はUCCエリアのすべての機関で実施されているが、調査結果は現時点では公開されていないため、ここでも数量的なデータを紹介できないが、ブローギー教員養成カレッジの担当教員ヘレン（Helen Casten）先生の総括的な感想として、「このプロジェクトは学生たちにはとても好評でアンケート以外でも学生たちから大きな反響があった」という。UCCでは今後もこのプロジェクトを推進していくことを決めているとのことで、ブローギー校でもメインテーマである「包摂」と「排除」を変更せずに、次年度も実施する予定であると自信たっぷりに答えてくださった。

4.2 PBL 型のプロジェクト・ワークから

TV-prof の取り組みの中で、学生たちが記録し続けるレジュメの内容をみると、最

初の1週目ではその日に自分が取り組んだ事実を断片的に記録するだけだったものが、4週目になると、対象を見る目が複眼化し、自分の見方・考え方を表明する文章を書く傾向が強くなる事実気づく。ある学生の4週目のレジュメを引用する。

「排除」とは、集団から個別に外れていること。集団内を希望しない、又は集団から外に出された状態をいう。もし「排除」が教育学的に悪なのだとしたら、どうして教員や保育士は子どもを「排除」するのか？

「排除」は、教育学的活動を「包摂」するためのバックグラウンドになりうるものとして考えられるか？日常において子どもを「排除」する保育士や教員は、社会的要因から、そうするのか、教育学の性質なのか？保育士や教員は、集団作業を行うことが「難しい」子どもへの「排除」的な実践を進展させてきたのか？

ブローゴーのヘレン先生いわく、教員養成において必要とされる「一般教養」、「心理学」、「教育学」等の科目内容が、このプロジェクトを通して総合的に学ばれるという。また、分析結果や結論とともに集められたデータ・知識の収集方法や分析方法に関する学習が深まり、得られたデータ・結果に対する信頼性、妥当性の検討もトレーニングされ、さらにその中からポイントとなる内容をしばってプレゼンテーションするという経験から多くのことを学ぶという。

4.3 日本の教員養成への示唆

教育実習期間が24週間もあるデンマークでも、いわゆる「リアリティ・ショック」による早期離職者の対策が必要とされている。子どもの目線で日常の教育環境を考えることの重要性を強調する路線からTV-profのプロジェクトが発足し、つながりあうべき専門職同士の協働が、養成段階でも重視する方向性の重要性をここに紹介した取り組みは示唆しているように思う。4週間の業種を越えた協働的な学びの装置となっているTV-profは、学生たちにさまざまな職業から事象を捉える経験を提供し、そして子どもの視点から見つめ直して考える経験を与えている。

近年の日本の教員養成政策に連動して、教職課程をもつ大学では教師としての力量のみならず、社会性や人間性などの「資質」や「使命感」までをチェックリストに盛り込む評価スタンダードを開発する動きが活発化している。そこで軽視されがちなのは、教育現場で求められる教師は、優れた個人であること以上に、チームの一員として教育実践の改善・向上に力を発揮できるような、関係的な能力が豊かな人材であるという側面である。それは職場が変わるごとに異なる態度・力量が求められるという状況依存的な性格をもつものであり、教室や職員室、学校や地域社会それぞれのコミュニティごとに固有な関係のつくりかたに臨機応変に自己調整できる教師でもある。そうした関係性を築く中で、個人のスキルアップや教職の専門性に関する個人的な発達が教員集団をレベルアップさせていく鍵となる。教員養成が競争原理の文脈の中で

個人の能力開発と個人単位の業績評価に傾倒しすぎると、教員文化は悪しき方向へ変質し、同僚性が停滞することは避けられまい。子どもたちが「居場所」にできる学校は、教員同士が同僚性を高め、日常的に「考え合う」協働を実現させている現場であると思う。デンマークの教員養成における協働モデルは、今後の日本の教員養成カリキュラムを考えていく上で、重要な要素を示唆しているものと言えよう。

註

- *1 デンマークの教員養成システムに関しては、デンマーク教育省の公式ホームページ <http://www.uvm.dk/>ほか、教員養成大学でのインタビューにより確認した事項を基に整理した。
- *2 1999年に29カ国がイタリアのボローニャに集まり、2010年までに統一された大学圏を構築するという「欧州高等教育圏」構想を採択した共同宣言。欧州域内の高等教育に共通の枠組みで学位システムと単位互換制度を構築し、人の交流を高め、欧州域内の高等教育の国際競争力の向上を狙いとしている。その後、「ボローニャ宣言」で提唱された改革内容の進捗プロセスを2年毎の会合で把握する「ボローニャ・プロセス」が進行している。ディプロマ・サプリメント（学位の学修内容を示す共通様式）の導入を進め、国境を越えた欧州大学間単位互換制度(ECTS)を確立させようとしている。最低3年以上の学修により取得する学士課程と、大学院では修士および博士課程の2段階にそえるなど取り組みは着実に実現に向かっており、現在このプロセスには46の国々が取り組んでいる。
- *3 1998年6月19日行政命令82号、デンマーク教育省（Ministry of Education）から出されている資料：*The Education System, Undervisningsministeriets Forlag*, 1998.参照のこと。
- *4 このTV-profの実践概要がアップロードされているインターネット上のサイト（デンマーク語）による。
- *5 このアンケートシートおよび回答結果に関しては公表されていないが、筆者の取材に際して質問紙のみ提供していただいた。

参考文献

- 1) 国立教育政策研究所『教育改革国際シンポジウム 21世紀の学校を創る』〈報告書〉,2002
- 2) 田邊俊治「デンマークの教員養成」,日本教育大学協会『世界の教員養成Ⅱ』学文社,2005
- 3) Ministry of Education, *The Education System, Undervisningsministeriets Forlag*.,1998
- 4) Skriftlighed i praktikken, Professionshøjskolen,København,Blaagaard Seminarium,2009

(2009年12月17日 受付)

(2009年12月17日 受理)